

## 通勤時間帯の幽霊

0

自宅から最寄り駅まで徒歩17分。  
更に各駅停車で1時間9分。  
そして会社まで徒歩3分。

通勤時間1時間29分。

彼にとってそれは、何ものにも代え難い安息の時間だった。

1

——そもそもの始まりは、私が彼の財布を拾った所からだ。

季節は酷暑が続く7月の終わり。時刻はまだ午前7時だと言うのに、冷房の効いた電車内に逃げ込む人々の顔は、しまい忘れたチョコのようにドロドロと地面に水滴を落としていた。

そんな中、私の視界の下部に一際小さな影が映り込んだ。

——あれは、財布か。

取り立てて特徴のない茶色の財布。

落としたのはずっと目の前に座っていた、財布以上に無個性なサラリーマンだ。どうやらおりこの駅で降りるらしく、立ち上がる際に滑り落ちたのだろう。周りを見渡すが本人を始め、それを拾おうとする人間はいない。通勤時間とは言えど、私が乗っていたのはラッシュを避けた各駅停車だ。人が少ないが故に落とした瞬間を見つけられたのだが、どうやら気付いたのは私だけのようであった。私は考える。

——この駅では特急の通過待ちで数分は止まるはず。

特に親切心が働いたわけではないが、見てしまったからには無視してはどうにも夢見が悪い。私は意を決して財布を拾い、彼の後を追いかけた。

その駅は周りに住宅地が少ない閑散とした駅だ。だからホームに出ればすぐに見つけられるはずであった。しかし――

――まさか、見失ったか？

改札まで小走りで来たのに、ついに彼の背に追いつくことは出来なかった。途中で見た人の数は精々十数人。見逃していたとは思えない。

だが結局その日、男の姿を再び見ることはなかった。立ち止まり汗が噴き出すと共に、私は電車の事を思い出す。そして後ろ髪を引かれつつも通勤電車へと引き返した。

それが事の発端――初日の出来事である。

――翌日、私は再び同じ時間、同じ車両で彼を待った。

そこに男はいた。毎日通勤しているのだから当然のことなのだが、不思議と私の口からは安堵の息が漏れだしているのに気付く。それほどまでに昨日のことは納得がいかなかったのだ。

後は「この財布、あなたのですかね？ 実は昨日落としていたのを見たのですが、話しかける前に見失ってしまって。はっはっはお互い暑さに負けず頑張りましょう」とでも言うって渡せば良いだけだ。……それだけなのだが。

「次は○○駅――○○駅――」

声をかけることなく、彼が降りる駅まで辿り着く。

そして彼が立ち上がると、今日は迷うことなく彼の真後ろへと動いた。

――そう、これは昨日のリベンジ。

昨日残されたしこりのような物を消し去る為。

明日から気持ち良く出勤できるようにするための儀式だ。この位置なら彼を見失うことはあるまい。後は改札近くまで付いて行って、必死に追いかけてきたていで渡せば問題解決だ。

だが、問題はその遙か手前――電車を降りた瞬間に起きた。

「なっ……!!?」

私は思わず声をあげる。  
車内では普通だった。どこにでもいる普通の男性。  
だが電車から降りた瞬間男の姿が薄くなったのだ。  
誰も気にしていないのだが、確かに彼は透けていた。僅かに透けるといったレベルではなく、既に気付いた時にはビニール袋程の影しか捉えられなくなっていった。  
そしてホームの階段に足を踏み入れた途端。スツと空気に溶けるように彼の姿は完全に見えなくなってしまうた。

「……………」

結局昨日と同じように——いや、昨日以上に呆然と立ち尽くす私だったが、これで分かったことは二つあった。

一つは昨日何故見失ってしまったのか。

二つ目は——彼が幽霊だということだ。

## 2

「上司がですね、二人常に監視についてるんですよ」

「は、はあ……」

「僕たち下っ端の評価は単純な成果物のみで決まるんですが、彼らの評価は部下の管理報告が重視されるんです。仕事そのものよりもね」

「なるほど」

私は男の話に何となく頷いていた。比較的静かな社内とは言えど、高校生など何人かは乗って雑談に華を咲かせている。サラリーマン二人が元気のない声で話していても気に留める者はいなかった。

——それとも幽霊である彼の成せる業だろうか。この存在感のなさは。

さて、何故こんなことになっているかだが、説明はさほど難しくはない。

あの翌日、何食わぬ顔で通勤中の彼に話しかけたのだ。

理由は単純なもので、私には彼の正体が掴めぬモヤモヤを抱えたまま、再び日常に戻る気がしなかったのだ。

財布を渡すと、彼は幽霊らしからぬ当たり前の感謝の言葉を並べ、呪うとも祟るとも——  
—ましてや成仏する様子もなく席に腰を降ろした。

——モヤモヤ。

ならばと作戦第2段階だ。このまま彼岸でも何処でも連れていけばかりに、彼の横に腰かけた。

そして話しかける。

私がするのは何でもない世間話だ。最近暑いですね会社まで歩くのは大変ですねあーそこにお勤めで知ってます知ってます私の姉の旦那の友人が昔住んだことがありまして、と表皮をなぞるように薄っぺらく害のない世間話。

だが彼の食いつきは思った以上だった。

数日もすると会社に行くのが如何に憂鬱かを毎日話してくれた。

「例えばですね。僕が仕事中に姿勢を直そうと座り直すと上司が声をかけて来るんですよ。おい、今日は落ち着きがないな。どこか調子が悪いのか。なんてね。僕は答えます。いえ、ちよつと疲れたので座り直しただけです。そこでまずいことを言ったなと口を塞いでももう遅い。疲れた？ 昨日は何時退社だ？ ……何だこんな時間か。俺が帰ったのはその2時間後だ。その俺より疲れてると言うことはそれだけの進捗があったわけだな。なんてね。その後はずっと昨日の作業を説明する時間です。今日の分は進められない。次の日にはそれを理由に怒られるんです。毎日その繰り返しだ」

「上に報告してみては？」

「無駄ですよ。上司はあくまでも僕の体を気遣っただけですから。優しくも職場に欠点があればすぐそれを見付ける上司。そしてそれを聞いてご満悦に対策とを練ろうと会議を開く更にも上の人たち。素晴らしい職場でしょう？」

「なるほど」

なるほど、幽霊の職場は何とも不思議な場所である。

——とは言え私は気付いていた。

彼が言うのは冥界の会社などでなく、あくまでも現実にある普通の会社であること。そして彼は自分が亡者であることに気付いてすらいないことに。

「家での僕はですね——あ、これでも一応結婚はしてるんですがね。家での僕は優秀な電化製品を目指してましてね」

「は、はあ……？」

更に数日が経つと彼は家の事も話してくれるようになった。

「まあ、意味が分かりませぬね。でも毎日そう考えて暮らしてるんですよ。それと言うのも僕の妻は喧騒が嫌いでした」

「そこは私と気が合いますね」

「僕もです。人気の料理屋よりも人気のないファミレスを好み、お祭りよりも庭でやる線香花火に目を細める。大和撫子なんて言ったら大げさですが、そんな彼女に僕は惹かれました」

「良い奥さんじゃないですか」

「でしょう？ それは結婚後も続きました。まずうるさいからとパソコンのスピーカーが捨てられましたね。ヘッドホンで聞いてくれと。まあ分からなくもない。僕は言う通りにしました。それから数日もしないうちにヘッドホンの音漏れを咎められました。仕方ない。確かに漏れては意味がない。いっそパソコンもいらないのでは？ 彼女の意見はもつともでした」

「……………」

「半年もしないうちにテレビが我が家から消えました。案外なくて困るものでもないんですよ？ 針の音をする時計は全てデジタルに。スマホはアラームも振動も禁止。シャワーの時間は一日5分間だけ」

「……………」

「ある日僕がうっかりスプーンを落としてしまったことがありましてね。カシヤンと。その時の妻は怖かった。一晚中大声で僕を罵りつづけました。騒音を立てるな。近所から文句来たらどうするんだ、と。昔に彼女の実家が隣家と問題になったことがあったらしくて、どうにも許せないらしいんですよ」

「……………」

「そこで僕はようやく悟りました。彼女が家での僕に求めることは静寂性なのだ。気付けば簡単でした。何といても見本は身の回りに沢山ある。洗濯機も冷蔵庫も騒音は少ない程優秀なんです。僕は家ではひたすら縮こまって静かに何もしないことにしました。ご飯は外で済ませて、妻が寝たら横になり、彼女が起きる前に目を覚ますんです。なかなか良く出来た夫じゃないですか？」

「そうですね」

そうですね。私にはありありと想像することが出来た。

時計の針ほども動かず、冷蔵庫よりも音を立てず、洗濯機より何かをするわけでもない。ただ部屋の隅で耳を塞いで静かに呼吸する彼の姿を。

会社では決められた以上の動きはせず、家では僅かな音も立てない。彼に安息の時間はないのか？

いや、そんなことはない。

それを直に聞いたのは数日後のことであり、また幽霊である彼の姿を見た最後の日でもあった。

4

その日は珍しく雨だった。

もともと地獄の籠を思わせる今年の暑さは、そんな天からの打ち水程度で和らぐことなく、じつとりと肌に熱を吸いつけるだけである。

彼はぼんやりと大雨の降る外を眺める。

「雨ですね」

「そうですね」

「僕は雨ってそんなに嫌いじゃないですよ」

「私もです。特に車内から見る雨は」

「気が合いますね。私の趣味は音楽と読書です。音楽は20年前の邦楽が好きで、本は旅行物のノンフィクションを良く読みます。だから電車ではそればかり楽しみますが、雨の日はついぼんやりと窓の外を見てしまうんですよ」

「いいですね」

「……以前、会社や家の話を聞いて、僕が一体どこでくつろいでいるんだろうと思いませんでした？」

「……………」

「遠慮せずとも当然の疑問です。僕自身だって何で病院にお世話にならないのか時々不思議に思いますからね」

「……………どうしてなんですか？」

「……………」

彼はすぐには答えなかった。だが別に答えたくないわけではないのだ。きっと言葉を探しているのだろう。それは彼が心の内から表に出すのが初めての言葉だからだ。

雨音を挟みながら数分間彼の答を待ち続け——やがて彼は口を開く。

「1時間と29分」

「……………」

「1時間29分。僕の通勤時間です。結構遠くから乗って来てるでしょう？ 本来なら特急で来るべきなんでしょうけどね。でも僕にとってはこれが不可侵の神聖なる時間なんです」  
「神聖な時間」

「そうです。ここでは例え本を読んでつい顔をしかめてしまっても、誰もそれを問い正さない。ここでは少しばかりイヤホンから音が漏れても誰も僕を罵らない——勿論最低限のマナーは守りますが——動けない？ 公共の場？ それでも僕は今これだけ自由です。こうしてお喋りも楽しめますね」

それを語る彼の目は死人のそれではなく、狂人のものでもない。

世界の素晴らしさに気付いた純粹無垢な瞳であった。

電車が目的駅に近付くにつれて雨は弱まっていく。

——いや、雨だけではなかった。

電車は駅に着くより遙か手前で速度を下げ、やがて何も無い場所で止まってしまう。車内に僅かな緊張と静寂が訪れる。またそれをかき消すかのようにアナウンスが流れた。

「——ただいま停車信号です。本日は大雨の影響によりダイヤが乱れており、お客様にはご迷惑を——」

どうやらただの信号のようだった。この路線では比較的珍しいことだが慌てるほどの遅延でもないだろう。私はホッとして横の男を見ると——

「まさか……僕はもう……」

彼は目を見開いて社外を凝視していた。

そして。

「え、なにこの煙は？」

「ドライアイス？」

「何だこれ!？」

車内に白い煙が立ち込める。霧やドライアイスとは違う不思議な霧。

どこかドロリと陰鬱で、冷たいのに人間の温かさも感じられ、この世のものでないよう

なそんな感覚。

そして煙が消えた時、彼の姿はなかった。

私は驚きつつも、ハッと気づいて慌てて外を見る。

そこには看板があった。書いてあるのは駅がある町の名前だ。

駅名とは違う、つい昨年に改名した新しい名前。

彼が死んでから変わったであろう新しい街の名前。

私は以前一度調べていた。

彼の通う会社が十年も昔に潰れていることを。

——それで知ったのか。今の自分がどうなったかを。

これは成仏と言えるのか分からない。通勤時間を大切に思うばかりにそこに縛られてしまった男。それ故に既にない会社にずっと通い続けてしまった哀れな男。家に存在せず会社に在籍もしない、電車の中だけに存在する地縛霊。そういえば彼は前にこう言っていたこともあった。

「この通勤時間が唯一僕が生きてると感じられる時間ですね」

全く笑えない冗談だった。

5

「それでその話は終わりなの？」

「不満か？ 神沼？」

私はその日懐かしき母校の寮にやってきていた。こういう話を好きな奴が多いのだ。後輩である神沼もその一人で、院に入ったのか留年してるのか知らないが、何年も前からここに居ついてはこうやって奇譚を集めているのである。

「不満じゃなくて、疑問かな」

「どこにだ？」

「だって数十年も同じ電車に乗り続けてる地縛霊なんですよ？ しかも財布の件からすると前日の記憶がないわけでもない。停車信号の位置なんて決まっているし、遅延はいくらでもあるんだから、たまたまその日だけ街名の変更に気付いたっておかしいよね？」

「……………まあその通りだ。気付いて当然だな」

嘘だ。私が疑問に思ったのはしばらくしてからだった。

「じゃあ何があったんだと思う？」

「そんなの私を知るわけじゃないじゃない」

そう言っただけでかわいこぶる神沼。お前は年幾つだ。私が呆れていると、神沼は「でも」と続ける。

「多分信号で何か——いや、誰かの方が可能性は高いかな？ を見たくらいは検討つくけどね。それについてはもう調べてあるんでしょ？」

「可愛くないなあ。まあその通りだが…………」

こいつの言う通り、気付いた後に改めて男の事を調べた。すると驚きの事実が分かった。

「その事実とは——」

「多分、彼は生きていた——ってところでしょ」

「うっ…………その通りだ」

そう、彼は生きていた。と言うよりも死んでなんかなかった。会社が潰れた後はその一つ手前に家に引っ越して、今もそこで暮らしていることが分かったのだ。

神沼はうんうんと頷いている。

「場所に固執し過ぎた生霊ねー、まあ体験はなかなか面白かったけど、調査の仕方と言うか構成に意外性が無いよねえ。つまり彼が見たのはたまたまそこを通りかかった今の自分だったと。幽霊ものとしては鉄板のオチね」

「お前は話が早いのは良いけど、話し甲斐がないよね…………」

勝ち誇る神沼に褒めてねえよと私は付け加えた。

残念がる顔をして。

——だが、その内心では実は「ざまあみろ」とほくそ笑んでいたのだ。

こいつの推理は間違っではない、がそれだけでは50点だ。

私が調べたのは単に住所だけではない。

彼が既に転職したこと、彼が離婚したことまで調べ上げた。

更にその幽霊であった彼が消えた場所まで直接歩いて行ってみたりもしたのだ。

そこで見た光景はこいつに話すでもない普通の光景。

幽霊の彼が最期に見たであろう光景。

朝焼けに照らされ電車で見るよりも少し老けて――だが健康そうな彼が、快活そうな女性と一緒に帰路についている。

その間には小さな子供。

そんな、とてもじゃないが神沼好みではない。

何の面白味もない気持ちの良い光景だった。